
名前で呼んで

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前で呼んで

【Nコード】

N0777G

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

名前にまつわる高佐の甘々ラブストーリーです。作者が勝手に作っちゃってる部分がありますが、大丈夫という方はどうぞ。（キーワード変更しました）

それは佐藤が初めて高木の部屋に来た時のこと。

「ねえ高木くん。」

二人がけとうには少し窮屈なソファに腰掛けてコーヒーを啜りながら、テレビを観ていた佐藤が突然ぼつりと高木に問い掛けた。

「ん？なんすか？」

佐藤の足元にぺたりと腰を下ろして同じくコーヒーを啜っていた高木は怪訝な顔で佐藤を振り仰ぐ。

「高木くんって自分の名前の由来、知ってる？」

佐藤は小さく笑いながら尋ねる。その無邪気な笑顔が可愛いらしくて高木は思わずどきりとする。心臓が跳ねたせいで持っていたマグカップを床に落としそうになり慌てて机に下ろすと、高木は顎に手をやり首を捻る。

「確か小学校の頃名前の由来を作文に書いたような覚えはあるんですけどねえ。何だったっけなあ。親父から聞いたような気はするんですが。」

何とか記憶を辿ってはみるものの、肝心な事がちつとも思い出せ無い。そんな高木に痺れを切らした佐藤がやや呆れた顔で問う。

「高木くん、漢字辞典ある？」

高木はますます首を捻り、

「国語辞典ならあつたと思いますけど、漢字辞典なんてあつたかなあ？」

と上目使いで記憶を辿る。

「もうっ、どっちでもいいからとにかく持って来てよ。」

佐藤は両手で包み込むようにして膝の上に置いていたマグカップを机に戻し、素っ気ない口調で高木に命令する。高木は敬礼でもしそうな勢いで「はいっ」と返事を返すと慌てて立ち上がり寝室にある本棚を漁り始めた。何段か探ったところで埃にまみれた漢字辞典を

発見し、高木は満面の笑みを浮かべて佐藤の元へと急ぐ。その様はさながら飼い主が投げたボールを拾って駆け戻る犬のようだった。

「佐藤さん、ありました！漢字辞典。」

やや興奮気味の高木からそれを受け取り、佐藤は無言でページをめくり始めた。

「佐藤さん、一体何を調べてるんですか？」

不思議そうに高木が尋ねると、

「んー。」

佐藤は短く気の無い返事を返す。佐藤がこつこつという返事をする時は、大概何かに集中している時だ。今までの付き合いでその事を十分理解している高木は口をつぐみ傍らでじつとその様子を見守っていた。

「あつた。涉。水の中を歩いてわたる。歩き回る。関係を持つ・・・」

佐藤が辞書に載っている語彙を片っ端から読み上げていく。その時、黙って聞いていた高木があつと声を上げた。

「それだ！思い出した。親父が言ってたんですが、確か涉という字には人との関わりとか懸け橋みたいな意味があるらしいんですよ。」

だから人との関わりの中で豊かな人生を送れるように、人を繋ぐ懸け橋として大きな男になれるようにって付けたいらしいですよ。その話を聞いた当時は親父の言ってる事の意味が良く理解出来なかったんですけど。」

上目使いで記憶を辿りながら高木がその名前の由来を答えると、佐藤は一心不乱に読み耽っていた辞書から顔を上げ、穏やかな顔で微笑む。

「素敵な由来ね。涉って高木くんにぴつたりの名前だわ。」
手放して褒められて高木は何だかくすぐったい気持ちになる。

「佐藤さんの名前だって佐藤さんにぴつたりですよ。」
美しくて和やかな子だなんて、と高木は少し照れながら言う。佐藤は少し頬を染め、そう？とまんざらでもなさそうに笑う。

「お互い素敵な名前をつけてくれた両親に感謝しなくちゃね。」

佐藤の言葉に高木も「そうですね」と笑顔を浮かべて頷いた。

少しの空白が二人の間を擦り抜けると、突然佐藤がもじもじと恥ずかしそうに口火を切った。

「ねえ。呼んでくれる？」

「は？」

佐藤の言いたいことがよく解らず、高木は短く問い返す。佐藤は少し怒ったような、それでいてどこか照れ臭そうな顔で呟く。

「名前。」

ようやくその意味が飲み込めた高木は耳まで真っ赤に染めて俯きがちに呟く。

「み、美和子さん。」

すると佐藤も微かに頬を赤く染めて答える。

「なあに？ 涉くん。」

二人は思わず顔を見合わせて笑う。

「何だか恥ずかしいですね。」

ぼりぼりと頬を掻きながら、照れ笑いを浮かべる高木に、

「あら、いいじゃない。二人だけの秘密みたいで。」

溢れんばかりの笑顔を覗かせて佐藤が答えた。

「そうですね。」

高木も思わず満面の笑みを浮かべて頷く。

二人だけの秘密、か。

高木は佐藤の言葉を心の中で噛み締める。

不意に佐藤が子どものように無邪気な顔で高木のTシャツの袖を引き、甘えた声で言う。

「これから二人きりの時は名前前で呼んで。ね？」

「えっ。」

余りに予想外の言葉に高木の思考回路はぴたりと止まった。

「何よ？ 何か不満なの？」

佐藤が眉根に皺を寄せ、じろりと横目で高木を睨みつける。

「あ、いえ。わかりました。美和子さん。」

高木が佐藤を名前で呼ぶと、佐藤はとても幸せそうにふんわりと微笑んだ。その笑顔が眩しくて、高木は思わず目を細める。

「自分の名前ってどこにでもあるありふれた名前だと思ってたけど、大好きな人に呼ばれると特別って感じがするわね。涉くん。」
天使の笑みを浮かべる佐藤に高木は返事を返すのも忘れ、ただただみとれていた。

(後書き)

またしても短編投下です。(連載を更新しろよと言われそうですが・
・)今回高木君の名前の由来を勝手に捏造してしまいました。不快に思われた方すみません。何故この短編を書こうと思ったかと言いますと、金弘は高佐モノを書く時、二人が互いを呼び合う場面でシーンによって呼び方を変えてるんですね。基本的に仕事などのシーンでは原作通り「高木君」「佐藤さん」を、プライベートなシーンでは「涉くん」「美和子さん」を使うようにしているんです。何故そうしているかという点、単に作者の願望なんですけど。で、二人がそう呼び合うようになるまでには何かきっかけがあった筈だよなあと思います。こういう事が二人の間にあつたら面白いかなあと思ったので書いてみました。はつきり言って自己満足です。すみません。最後まで呼んで下さったみなさんありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777g/>

名前と呼んで

2010年11月17日14時42分発行